

ロシアの愛国主義と自国史像  
—マンネルヘイムの記念彫刻をめぐる論争—

Russian Patriotism and National History:  
The Mannerheim Plaque Controversy

立石 洋子\*  
Yoko Tateishi

**Abstract**

Carl Gustaf Emil Mannerheim was a lieutenant general of the Russian Empire who was loyal to Nicholas II and served in the Russo-Japanese War and World War I. After the 1917 Revolution, he moved to Finland, where he fought as a commander of the White Guard in the Finnish Civil War; subsequently, he fought against the Soviet Union in the Winter War and World War II. As a result, his evaluation has often caused controversy in Russia; the most significant one surrounded the installation of his commemorative plaque in St. Petersburg in 2016. This paper will utilize this controversy to exhibit the lack of a common understanding of patriotism in Russia. Further, it will reveal the characteristics of Russia's perception of history, which cannot be understood simply by arguing that the regime uses it as a tool to foster patriotism.

**I. 本稿の課題**

本稿は、サンクト・ペテルブルクにロシア軍事史協会が2016年に設置したカール・グスタフ・エミール・マンネルヘイム（1867～1951）の記念彫刻をめぐる論争を検討する。ロシアの歴史認識を分析した多くの先行研究は、ロシアでは政権に忠実で愛国的な国民を創るための道具として、独ソ戦をはじめとする自国史像が利用されていると強調する（たとえば、Pearce, 2021）。しかし、愛国主義的な歴史認識という概念はあらゆる国でつねに論争の対象になりうる。それは、自国史のどの時代のどのような勢力の視点から歴史を見るかによって、その評価が変わるためである。さらに、望ましい愛国主義とはどのような概念なのかという問題について、ロシアの社会に一致した見解があるわけではない。実際にソ連解体後のロシアでは、新たな国家を建設するうえで、自国の歴史をどう評価するべきなのかという論点に関心を集め続けており、これらの議論にはさまざまな自国史像が現れている。そこで本稿はこれらの無数の議論のなかから、2016年に設置されたマンネルヘイムの記念彫刻に関する論争に注目し、ロシアの歴史認識の特徴の一

---

\* 同志社大学グローバル地域文化学部 Faculty of Global and Regional Studies, Doshisha University

端を明らかにすることを試みる。

## II. マンネルヘイムの再評価と議論の始まり

本稿が検討する記念彫刻のモチーフとなったマンネルヘイムは、1867年にロシア帝国のフィンランド系スウェーデン人の家庭に生まれた。首都サンクト・ペテルブルクの騎兵学校を卒業した後には宮廷厩舎や騎兵士官学校などでの勤務を経て、1906年には諜報活動のために中国に派遣され、地形や軍事施設などの情報を入手したことが高く評価された。さらに日露戦争や第一次世界大戦でも活躍し、1914年にはロシア帝国の最高位の軍事勲章を授与されている。1917年に革命が起こり、ボリシェヴィキが政権を獲得するとマンネルヘイムはロシアを去り、独立したフィンランドに移住した。1918年のフィンランド内戦では白衛軍の司令官として戦闘を指揮して勝利を収め、1939～40年の冬戦争ではフィンランド軍の総司令官としてソ連と戦った。1941年にはドイツと同盟を結んで再びソ連との戦いを指揮したが、戦況が悪化すると1944年8月に大統領に就任し、ソ連と休戦協定を結んだ。

ロシア、フィンランド両国でマンネルヘイムへの関心が高まったのは冷戦終焉後のことだった (Meinander, 2011: 69)。たとえば1994年にロシアの学術誌『歴史の諸問題』が掲載したフィンランドのジャーナリスト、ヤルモ・ヴィルマヴィルタの論説は、国家を統一し、ソ連との冬戦争と第二次世界大戦を生き抜いたフィンランドの闘争を象徴する国民的英雄としてマンネルヘイムを評価した (Вирмавирга, 1994: 74)。サンクト・ペテルブルクに住むレオニード・ヴラーソフはフィンランドとロシアで計13冊のマンネルヘイムの伝記を出版し、2002年には、ロシアでマンネルヘイムを主人公とする小説も出版された。さらに翌年には、マンネルヘイムの回想録のロシア語訳が出版されている。2002年に出版された小説の著者ヴィクトル・ポティエフスキーは、マンネルヘイムをロシア参謀本部で活躍し、日露戦争、第一次世界大戦を戦った愛国主義者、フィンランド独立に貢献したフィンランドとロシアの国民的英雄と評価して、ソ連の指導者は第二次世界大戦後、彼を信頼できるパートナーとみなしていたと述べている。これに加えて、第二次世界大戦期には、フィンランドとソ連の国境をレニングラード (現サンクト・ペテルブルク) から遠ざけるというソ連の領土交換の要求に賛成していたこと、ドイツの同盟国としてレニングラード封鎖に協力したものの、レニングラードを直接攻撃することはなかったことなどが強調されてきた (Овсянов, 2003, Screen, 2000, Черняев, 2018: 301, Володченко, 2001a,b, Миронова, 2007)。

他方で、彼が白衛軍の指揮官として戦った1918年のフィンランド内戦で多くの犠牲者が出たことも議論を集めている。フィンランドの歴史家エレオノーラ・ヨッフエによれば、フィンランドでも同様にマンネルヘイムに対して複雑な感情があり、内戦で多くの犠牲者が出たタンペレに彼の記念碑が建設された際には赤いペンキを塗られるという事件が起こった (Дубшан, 2017)。さらに近年では、赤衛軍とは関係のない多くのロシア人が殺害され、それが革命運動への敵意だけでなく、人種主義的な概念によって正当化されたことも明らかになりつつあり、それに対する責任を問う声もある (Рогозина, 2014, Лумме, 2016)。第二次世界大戦については、ドイツ軍のフィンランド領内への駐留を認め、64万人以上の犠牲者を出したレニングラード封鎖に協力したことが注目され、彼がレニングラードを直接攻撃しなかったのは、フィンランド軍の状況からそれが不可能だったからに過ぎないという主張もある (ИА REGNUM, 2016p)。またフィンランド軍が1939年の冬戦争開戦前の国境を越えてソ連領の東カレリアを占領し、そこにロシア人など非フィ

ン・ウゴル系の住民をフィンランド人やカレリア人と区別して収容する収容所を設置したこと、多くの囚人が不衛生な環境と飢えから死亡したことも関心を集め、これらの政策が正当化された背景には人種的に純粋な大フィンランドを創るという民族主義と反共産主義の思想が結びついたマンネルヘイムの指令があったとも批判されている（Георгиев, 2001, Майорова, 2016）<sup>1</sup>。

2001年にはフィンランドを公式訪問したプーチン大統領が、ソ連・フィンランド関係の発展に貢献したケッコネン元大統領の墓とともに、マンネルヘイムの墓にも花を捧げたことが国内外の注目を集めた。1992年にマンネルヘイムの墓を訪れたエリツィン大統領は献花はしなかったために、フィンランドの報道機関はこれを「政治的和解のジェスチャー」と呼んだ（BBC, 2001）。国内では、ロシアが既存の協力関係の強化を望むことをフィンランドに示したとして評価された。他方で、フィンランドではこれがロシアの弱さを示す証拠とみなされ、「カレリア返還」を求める要求が増加するのではないかと推測する声も上がった。またクラスノヤルスクの新聞は、ナポレオンとの戦いから100年後にロシア帝国の将軍や皇帝自身がナポレオンの墓に献花することは想像できないとして、プーチンが個人としてマンネルヘイムにどのような感情を持っているとしても、国民を代表する大統領として献花すべきではなかったと批判した（Ханбабян, 2001, Пырх, 2001）。共産主義を支持する『ソヴィエト・ロシア』紙も、マンネルヘイムが優れた軍司令官、外交官、政治家だったことは間違いないとしながらも、独ソ戦でフィンランドが東カレリアを占領し、非フィン・ウゴル系住民の強制収容所を設置したことを強調し、彼がレニングラードを攻撃しなかったのは愛着からではなく、ドイツ軍の弱体化や英米の圧力のためであり、1944年にソ連と和平を結んだのは軍事的敗北のためだったとして、マンネルヘイムをロシアの国民的英雄とみなす理由はないと主張した（Георгиев, 2001）。こうしてプーチンの行動は賛否両論を呼んだが、同年には、サンクト・ペテルブルク市の外交委員会副代表と国際協力担当を務めるウラジーミル・チューロフが伝記作家ヴラーソフの提案を受けて、2003年の市制300周年に向けて、マンネルヘイムが働いていた宮廷厩舎の一室を再現した博物館の開設を市に提案した。この提案は外務省の支持も得て、市の政府と議会による検討が続いた。さらにチューロフは2005年には、マンネルヘイムに関する書籍を出版している（Чуров, 2005: 242-245）。また2004年には市議会議員ウラジーミル・ゴリマンが、マンネルヘイムが住んでいたザカリエフスカヤ通りの建物に記念彫刻を設置することを提案した。ゴリマンはその理由について、彼はロシアの将軍だったとし、ヒトラーやスターリンといった強力な人物の間で耐え、フィンランドを重要な国にすることができたのは彼だけだと説明している（Медведева, 2009）。翌年にはヘルシンキのサンクト・ペテルブルク財団の主催で「マンネルヘイム ロシアの将校、フィンランドの元帥」展が同市の国立エルミタージュ美術館で、5年間の準備を経て開催された。展示はヒトラーとの協力には触れず、パンフレットは、彼は第二次世界大戦期にドイツとの同盟を強いられたが、ドイツの要求にもかかわらずレニングラード攻撃を拒否したと説明していた。この展示には多くの市民が驚き、年配の訪問者からは、フィンランド人が私たちの街を爆撃したのではないかと、ナチスに飛行場を提供していたのではないかとといった憤慨の声が聞かれたという（Ерофеев, 2005, Набойщиков, 2005）。また生誕140周年にあたる2007年5月には作家ヴラーソフの提案で、サンクト・ペテルブルク市の中央区区政府と市政府の対外関係委員会、フィンランド総領事館の後援を受けた国際学術会議が開催された。ヴラーソフによればこの会議はマンネルヘイムについて公の場で議論する初の機会であり、開催自体がセンセーショナルな出来事だった（Санкт-Петербургские

<sup>1</sup> 2006年にはハバロフスクの新聞に、収容所から生還したイヴァーン・エフセーエフの回想が掲載された。彼はここで、飢えと寒さに苦しんだことや母親が看守に殺害されたこと、今も収容所の夢をよく見ることなどを語っている（Тизонова, 2006）。

ведомости, 2007, Миронова, 2007)。同年にはペトロザボーツク市でも、市議会議員ヴラジスラフ・グリーンがマンネルヘイムの記念碑建設を提案した。しかし、独ソ戦期のフィンランドの強制収容所から生還した人々を作る団体は、この提案を「高齢者や国民の感情に対するあざけり」だとする意見書をカレリア州知事セルゲーイ・カタナードフに提出した。彼は、記念碑の設置に関する住民の議論を禁じることはできないとしながらも、最終的には記念碑設置に反対したため、この提案は実現しなかった（Курьер Карелии, 2007, РИА НОВОСТИ, 2007）。

こうしたなかで2009年には、メドヴェージェフ大統領がマンネルヘイムの墓に献花するとともに（Черняев, 2018: 300）、サンクト・ペテルブルクでは著名な作家ダニール・グラーニンが、マンネルヘイムが住んでいたザハリエフスカヤ通りの建物に記念彫刻を設置することを再び提案した。グラーニンは作家アレシ・アダモヴィチとともに、レニングラード封鎖を体験した人々のインタビューや回想などを収録した書籍を1979年に発表したことで知られており<sup>2</sup>、提案は市の対外関係委員会代表アレクサードル・プロホレンコや市議会議員ヴァタニヤール・ヤーギヤにも支持された。ヤーギヤは、冬戦争を開始したのはソ連の側だったと述べたうえで、第二次世界大戦期のマンネルヘイムの役割は評価されるべきだとして提案を支持した。歴史家レフ・ルリエーも、ピョートル大帝やレーニンにはさまざまな評価があるが、だからといって彼らが偉大な人物ではないというわけではないとし、マンネルヘイムはロシアの軍隊のために、フィンランドの自由のために誠実に戦ったのだと主張した。しかし、この提案を審議した市議会の文化委員会は、採択を見送ることを決定した。『フォントanka』紙の取材に対して文化委員会は、彫刻の設置について社会がコンセンサスを獲得するには公開討論が必要だという結論に達したとし、レニングラード封鎖の解除から65周年にあたる年にこの問題の決定を急ぐ必要はないと説明した。文化委員会代表アントン・グバンコフは、プーチンとメドヴェージェフがマンネルヘイムの墓を訪問したのは外交上のミッションの枠組みの中だったとして、「退役軍人の皆さんの年齢を考えれば、これは大きな痛手になるかもしれません。戦争の英雄の功績を尊重し、先祖の記憶を大切にしている親族にとっては衝撃です。彼は敵だったのですから。そして、どの敵がより人道的だったのかと議論することは、非倫理的で正しくありません」と語った（Медведева, 2009）。

その後もマンネルヘイムの記念に関する議論は続き、2013年6月にはセルゲーイ・シヨイゲー防衛大臣がマンネルヘイムの墓に献花した（Черняев, 2018: 300）。さらに2015年には文化大臣ウラジーミル・メディンスキーの提案で、ロシア帝国軍情報部が使用していたサンクト・ペテルブルク市内の建物の入り口にマンネルヘイムの彫刻が設置されたことが大きな関心を集めた。彫刻の設置は市議会では全く議論されておらず、文化省のウェブサイトに、メディンスキーが彫刻の除幕式に参加するという情報が掲載されたことで広く知られることになった。『フォントanka』紙が文化省に問い合わせたところ、メディンスキーが代表を務めるロシア軍事史協会の学術部門代表コンスタンティーン・パハリュクが回答し、「マンネルヘイムがロシア軍の将校であると同時に、ロシアの諜報員であったことを強調することが彫刻の理念の1つだ」と述べたという（Асанова, 2015）。ロシア軍事史協会は、1907年のニコライ2世の勅令で創設され、1917年まで存続したロシア帝国軍事史協会の活動を継承する組織として、2012年12月の大統領令によって設立された。協会の代表には同年に文化大臣に就任したメディンスキーが、理事会の代表には大統領府長官セルゲーイ・イヴァノフが就任しており、政権と密接な協力関係にあると考えられている。協会はロシア軍事史の研究促進を通じた愛国心の教育を目的の1つに掲げ、その

<sup>2</sup> 本書はそれまで公の場では語られることのなかった過酷な経験を詳細に記したことで議論を集めた（立石 2019:237）。

一環として皇帝や軍事指導者の記念碑や記念彫刻の建設に各地で取り組んでいる（*Российское военно-историческое общество*）。しかし、この彫刻は地域の退役軍人や知識人から大きな反発を受け、6月18日に予定されていた除幕式の前夜に何の説明もなく、突然取り外された。『フォントanka』紙の取材を受けたメディンスキー自身も、なぜ彫刻が消えたのか分からないと回答したという。彫刻に対する批判のなかには、サンクト・ペテルブルクでマンネルヘイムを記念するという取り組みは歴史の理解ではなく、社会の分裂につながりうるという意見もあった。たとえばマンネルヘイムを有能な政治家として尊敬しているという郷土史家ヴラジーミル・チュクノーフは、彼は反ロシアではなく反ポリシェヴィキであり、もし彼がいなかったら両国の関係はレニングラード封鎖の期間も含めてはるかに悪化していただろうと述べながらも、一義的な評価が下せない人物の彫刻を設置するには、社会の議論や公文書の公開、歴史文書の読解が必要だと主張した（Хакназаров, 2016, Зубов, 2015）。

### Ⅲ. 2016年のマンネルヘイムの記念彫刻の設置をめぐる論争

以上のようにロシアでは、サンクト・ペテルブルクを中心としてマンネルヘイムの評価について議論が続いてきたが、2016年6月には再びサンクト・ペテルブルク市内の建物に、銅板にロシア帝国軍の制服を着たマンネルヘイムの浅浮彫が施された彫刻が設置され、この問題が再び大きな注目を集めることになった。この建物は防衛省に付属する軍事工学技術大学が所有しており、かつてこの場所にはマンネルヘイムが所属したロシア帝国騎兵連隊の建物があった（Черняев, 2018: 301）。除幕式は6月16日に行われ、ロシア軍事史協会理事会代表のイヴァノーフ大統領府長官と協会代表のメディンスキー文化大臣のほか、2000年代初頭にマンネルヘイムの博物館の開設を市に働きかけたチューロフ、副市長アレクサンドル・ゴヴォルノフらが出席した<sup>3</sup>。メディンスキーは祝辞の中で、この記念彫刻は革命が社会に生み出した悲劇的な溝を埋めるためのロシア軍事史協会の試みの1つだと述べた。またイヴァノーフは、マンネルヘイムの1918年以降の行動を白紙にしようとする人はいないが、彼がロシアのために行った価値ある奉仕を忘れてはならないと発言した。さらに、大統領府副長官で報道官のドミートリー・ペスコーフも除幕式の当日に彫刻に言及し、マンネルヘイムの人物像はいまだに議論の対象となっており、今後長い間歴史家の研究が続くだろうとしたうえで、彼が非凡な人物であり、我々の歴史に関連する人物であることは確かだと述べた（Петров, 2016, РИА НОВОСТИ, 2016d）。これに対して除幕式では、ソ連時代の肯定的側面を強調し、その否定的評価と闘うことを目標に掲げる政治団体「時代の本質」が、「マンネルヘイムはヒトラーと同じレニングラードの救世主だ」と書かれたプラカードを掲げて抗議活動を行った。チューロフは抗議活動を行う人々に、マンネルヘイムの記憶の永続化は彼の伝記作家ブラソフの構想だと説明したが、祝辞を述べるメディンスキーに対して、「恥を知れ!」、「マンネルヘイムはロシア人を殺したんだ!」という非難の声が上がった。メディンスキーはこれらの非難に答えて、スターリンも彼を評価していたと述べ、たとえ完璧な人物ではないとしても、彫刻を設置する意義があると反論した。その後、儀仗兵が彫刻の前を行進すると、「敬礼するな!彼はレニングラード封鎖に加わったんだ!」という抗議の声が再び上がった。これを報道したレグナム通信は、クレムリンはヒトラーの同盟者のために封鎖を体験した人々、

<sup>3</sup> チューロフは2007年3月から2016年3月まで中央選挙管理委員会委員長を務め、同年7月に外務省の特命全権大使に就任した。

レニングラードを防衛した人々を裏切ったと伝えた。さらに除幕式の数時間後には何者かが緑色のペンキの缶3本を彫刻に投げ付け、士官候補生がそれを取り除いた。しかし、6月19日には再び赤いペンキが塗られているのが発見された（Мерзликин, 2016, ИА REGNUM, 2016h）。

除幕式の日が始まったサンクト・ペテルブルク国際経済フォーラムに出席したフィンランドのオッリ・レーン経済開発大臣は彫刻について意見を聞かれ、「マンネルヘイムがロシアでいまだに記憶され、その記憶がある種の形で尊重されているのは非常に興味深い」と述べた（Мерзликин, 2016）。またフィンランドのあるメディアは、彫刻設置の背景にはプーチンのマンネルヘイムへの尊敬があるのかもしれないと報道した（Ахонен, 2016）。他方でカレリア地峡軍事博物館の館長バイール・イリンチューエフは、彫刻設置の理由は除幕式に出席した数人の高官の野心にあるのかもしれないし、長年のパートナーであるフィンランドに敬意を示すためかもしれないと述べたうえで、フィンランドではマンネルヘイムに対してさまざまな評価があり、彼を無条件にフィンランドの英雄と見なすのは客観的ではないと指摘した。さらに、彫刻設置の目的は白衛軍の側に立つことにあるとし、メディンスキーが言うような社会の分裂の克服には全くつながらないとも述べて、あらゆる内戦は社会に傷跡を残し、それは100年後でさえも癒えるとは限らないと語った（Фонтанка.Ру, 2016b）。また歴史学博士オレク・ナザーロフは、スターリンが独ソ戦後に近隣諸国と良好な関係を築くために彼をフィンランドの戦争犯罪者から除外し、その後もフィンランドとの関係が特別だという理由でレニングラード封鎖への加担について沈黙してきたこと、さらに1990年代以降のロシアの対外政策でフィンランドに期待が寄せられたことが、マンネルヘイムに対する共感の背景にあると述べる。ナザーロフによれば、君主主義者や親西欧のリベラルはともにスターリンの政策を酷評しているにもかかわらず、マンネルヘイムへの共感を正当化するために独ソ戦後のスターリンの態度を引き合いに出しているのだった（Назаров, 2016）。さらに政治学者アレクセイ・マカールキンは、この彫刻の設置には、偉大な国家を建設した人々を「正しい」とみなす帝國的アイデンティティの形成のための副次的な学問として歴史学を捉える見方が反映されていると述べている（Аптекарь, 2016）。

他方で、この取り組みを支持する声も上がった。2009年に彫刻の設置を提案した作家グラニン『フォンタンカ』紙のインタビューに答えて、マンネルヘイムがヒトラーの要求に反してレニングラードを攻撃しなかったことが、数千人の命を救ったのだと述べた（Фонтанка.Ру, 2016a）。また歴史家キリール・アレクサンドロフは、彼は1917年までロシア軍に忠実に従軍し、10の勲章を授与された帝国陸軍を代表する人物であり、サンクト・ペテルブルクのシンボルの1つだと主張した。さらに、レニングラードでは彼の彫刻は不適切だが、私たちの街は25年前から再びサンクト・ペテルブルクと呼ばれるようになったのだとも述べた（Вольтская, Баратов, 2016）。歴史家В.К. アブラモフは、マンネルヘイムはニコライ2世を戴冠式でエスコートした4人の騎兵の1人であり、皇帝を深く敬愛していたとし、ロシア人やロシアを憎んでいたという非難とは一致しないと主張した。またフィンランド内戦で革命運動とは無関係のロシア人が犠牲になったことについては、軍隊の規律違反やフィンランド人のロシアへの憎しみ、フィンランド政府の政策が原因であり、彼に責任はないと主張した。さらに冬戦争では自国を防衛し、その後の独ソ戦期にも自国の防衛のために戦争に加わることを余儀なくされたとして、彼の目的はフィンランドの主権と独立の維持にあり、冬戦争を開始したスターリンに比べれば、レニングラード封鎖やその犠牲者に対する責任ははるかに小さいと述べて、彼は誠実で尊敬に値する敵だったと主張した（Абрамов, 2016: 58-62, 67）。ロシア正教とロシア帝国の歴史を称揚する『ロシア人民戦線』紙に寄稿したヘルシンキ大学のヨハン・ベクマンも、彼は多くの白系将校と同様に反ボリシェヴィキであって反ロシアではなく、最後までロシア皇帝に忠実だったとして、

彼は物議をかます人物だが、両国の歴史家が議論を始めることで両国の関係強化にもつながると主張した。ベクマンによれば、重要なのは1944年秋以降にマンネルヘイムがドイツとの同盟を放棄し、ソ連の同盟国として現在も続く両国の善隣関係を築いたことであり、スターリンも彼がフィンランド人の最大の求心力であることを理解していた。また、レニングラード封鎖や東カレリアの強制収容所での民族浄化、多数のソ連人捕虜の犠牲の責任が彼にあることは間違いないが、ボリシェヴィキに対抗するにはあらゆる手段をとる必要があり、そこにナチスとの協力も含まれていたとベクマンは主張した（Бекман, 2016）。政治学者ゲオルギー・ポフトは、現政権は第二次世界大戦の歴史は神聖で不可侵だというプロパガンダを熱心に維持しており、マンネルヘイムがナチスの同盟者として封鎖に加担した街に彫刻を設置するのは奇妙だと語った。他方で、彼は日露戦争や第一次世界大戦などで活躍した忠実な君主主義者であり、ボリシェヴィキを支持することはなかったのだから、裏切り者と呼ぶのは間違いだとも述べた。さらに、冬戦争はフィンランドにとっては防衛戦争でソ連は加害者であり、マンネルヘイムは当初からソ連の国境変更の提案に同意して問題を平和的に解決しようとしたとし、第二次世界大戦ではドイツ軍への直接の従属を避け、レニングラード封鎖でのドイツ軍への支援は限定的だったとも強調した。ポフトによれば、フィンランドが東カレリアで行った強制収容所の設置などの政策は民族浄化であり、収容所では多くの犠牲が出たものの、当時はスターリンやルーズベルトら多くの政治指導者がこれを実行しており、ナチスのような意図的な大量殺戮とは違うのだった。これに加えて処刑者、殺人者であり民族浄化の実行者であるソ連の指導者たちは今も赤の広場に埋葬されており、その名前は各地の地名に残されているとして、マンネルヘイムを強制収容所の「看守」と呼んで彫刻設置に反対するのは偽善的だとも述べた（Бовт, 2016）。

それと同時に、彫刻設置に反対する意見も多数提起された。カレリア地峡軍事博物館の館長イリンチューエフは、マンネルヘイムは内戦では白衛軍による虐殺を防がず、その後もカレリア併合を支持し続け、1941年にはそれを実行したとし、それを諦めたのはソ連の勝利が確実になった後だったと主張した。さらに、彫刻設置の提案者である文化大臣メディンスキーはマンネルヘイムとナチスの同盟を忘れてニコライ2世への忠誠を思い出そうと言うが、1人の人間の生涯をこのように分解することはできないとも述べた。イリンチューエフによれば、ヒトラーやスターリンについても同様に多くの肯定的な事柄を思い出すことはできるが、そのような試みは歴史における個人の役割を評価するうえで学術的でも客観的でもないのだった。さらに、彫刻の設置は革命が生んだ悲劇的な分裂を克服するための取り組みだというメディンスキーの発言についても、明らかに逆効果だと批判した（Фонганка. Ру, 2016b）。この発言についてはサンクト・ペテルブルクの退役軍人評議会副議長レフ・バラノフも、もしメディンスキーが文化大臣としてこのような方法で国民を団結させようとしているのなら大きな間違いだと述べて、当局は逆に自ら社会を破壊し、分裂させていると非難した（Табаринцев-Романов, 2016）。サンクト・ペテルブルク国立大学近現代史講座長ウラジーミル・バルイシニコフは、マンネルヘイムは第二次世界大戦で占領したカレリアに人種主義的な体制を確立したと主張し、ロシア系住民が送られた強制収容所の死亡率はドイツの収容所よりも高かったと主張した（Мерзликин, 2016）。さらに、メディンスキーが大臣を務める文化省の社会評議会に所属する翻訳家ドミートリー・プチコフも、彫刻の設置は我々がネオナチズムの方向に確実に進んでいることを意味するとし、次はモスクワにヒトラーの記念碑が建てられるだろうと非難した（Майорова, 2016）<sup>4</sup>。元外交官で政

<sup>4</sup> 文化省の社会評議会は、演劇や音楽、映画、文学、文化財の保護などさまざまな分野の専門家の団体の代表者から構成されている。

治アナリストのミハイール・ディエムリンは、マンネルヘイムがニコライ2世の忠実な將軍であり、第一次世界大戦の英雄であったことは間違いないとしながらも、内戦ではロシア人に対する意図的な弾圧に加わり、その後は一貫して我が国の敵だったとして、もっとも重要なのは、彼が我が国との友好関係を支持したのはロシアが強力で、他に解決策が存在しないときのみだったことだと主張した（Демулин, 2016）。

彫刻は政治家や歴史家だけでなく、戦争を体験した人々やその家族、地域の歴史に関心を持つ市民の反響を呼んだ。サンクト・ペテルブルクの『フォンタンカ』紙が読者に実施したアンケートによれば、32%の回答者が彫刻設置に反対し、25%の回答者が、彼は複雑すぎる個性を持っていると回答した。他方で彫刻の設置に賛成したのは22%であり、15%は住民投票で決めるべきだと回答した（Аптекарь, 2016）。「封鎖されたレニングラードの住民協会」代表のイライダ・スクリパチョーヴァは『自由新聞』のインタビューで、封鎖でほとんどの親族を失ったことを語り、文化大臣や著名な政治家、大統領府の長官がなぜここまで墮落してしまったのか、彼らはロシアの最高権力を代表することで、その評判を落としていることを理解しているのだろうかと述べた（Николаева, 2016）。彫刻が設置された軍事工学技術大学ではある教員が匿名を条件としてインタビューに答え、自分の祖父はレニングラード戦線で戦ったと述べて、もし今祖父が生きていたら、彼の目を見るのが恥ずかしいと語った（Мерзликин, 2016）。

他方で彫刻の設置に反対する意見のなかには、マンネルヘイムの評価とは別に、設置の決定過程に問題があったという批判も見られた。市内の学校の歴史教師で、自由主義・保守主義の立場に立つ「発展党」に所属する市議会議員マクシム・レーズニクは、市政府の記念碑評議会の委員と市議会の文化委員会の代表を務めているにもかかわらず、彫刻設置について何の連絡も受けなかったとして、市民の意見を聞くシステムが機能していないと批判した。彼は、レニングラード封鎖を記憶している人々はこの彫刻を快く思わないかもしれないし、誰かを侮辱するために作られたように見えるとして、問題は社会との協議なしに設置を決定したことにあると主張した（ЗАКС.РУ, 2016）。またジャーナリストのエレーナ・スクヴォルツォヴァも、記念碑設置の手続きを定めた市の法律によれば、市の文化委員会での審議の後に区か市の当局の決定が必要であることに言及し、彫刻の設置が秘密裏に決定されたことを批判した。ジャーナリストのアーナ・コチャロヴァも、市当局や市民との合意なく彫刻を設置したとしてロシア軍事史協会を批判し、歴史的記憶は一部の人にとっては政治的問題を解決するための補助的な道具として役立つかもしれないが、今回のように世論や歴史的真相を軽視すれば何も良い結果をもたらさないと主張した（Скворцова, 2016, РИА НОВОСТИ, 2016e）。

さらに除幕式から12日後の6月28日には、サンクト・ペテルブルクに住むパーヴェル・クズネツォーフが市政府に対して行政訴訟を起こした。訴状は、独ソ戦期の東カレリアでのフィンランド軍の行為やフィンランドが設置した強制収容所に関する資料、マンネルヘイムの命令書や発言の抜粋などを引用したうえで、自身の2人の祖父が独ソ戦を戦ったことを説明し、祖国を憎み、悪と不正をもたらした人物の彫刻を設置することは祖先に対する不敬と、その偉大な功績の忘却を意味すると主張した。さらに、サンクト・ペテルブルクにこの彫刻を設置することは、市民としてマンネルヘイムの歴史的記憶を保存して次世代に伝え、彼を敬う義務を負うことになり、したがって彫刻を設置した市政府は市民である私の人間としての尊厳を傷つけていると訴えた。代理人の弁護士イリヤ・レメスロは彫刻の設置を許可したことを示す公文書の公開を市政府に求めるとともに、訴状をTwitter上で公開し、広く支援を訴えた（ИА REGNUM, 2016a,m, РИА НОВОСТИ, 2016c）。

7月1日にはサンクト・ペテルブルクで、政治団体「時代の本質」が彫刻の撤去を求める会議

を開催した。会議には同団体の会員のほかに、レニングラード封鎖の生存者を含む戦争体験者や歴史家、芸術家、聖職者らが出席した。会議後に全会一致で採択された決議は、彫刻の撤去に加えて、独ソ戦期にナチの側で戦った人々の英雄化をやめること、記念碑の対象となる人物を選ぶ際には世論に基づいて決定すること、独ソ戦での勝利が社会を統合する重要な出来事であることを記念碑建設の際に考慮することを市長に要求した。この決議はプーチン大統領とメディンスキー文化大臣、ショイグー防衛大臣にも送付され、防衛省は後に受け取った決議文をサンクト・ペテルブルク市の文化委員会に転送した。さらに同日までに、他の35以上の都市でも抗議集会が開かれたという (Livejournal, 2016, ИА REGNUM, 2016d)。チェリャビンスク市では、「時代の本質」とレニングラード封鎖の経験者の家族が抗議集会を開催した。集会に参加したリュドミラ・クリコーヴァはインタビューで、独ソ戦期に家族とともにレニングラードからチェリャビンスクに避難したこと、叔父がレニングラード防衛戦で行方不明となったことを語り、レニングラード封鎖は家族の歴史とロシアの歴史に結び付いているので、この彫刻について知ったときは辛かったと話した。さらに、もしこのような「リベラリズム」の方向に向かえば、今度はヒトラーの記念碑が建てられるのではないかと語った。「時代の本質」チェリャビンスク支部の代表ドミトリー・ペルミャコフは、彫刻の設置は私たちの顔に唾を吐きかけているだけでなく、私たち1人1人にとっての試練でもあるとし、「祖先を殺した迫害者」の英雄化を許さないためにできる限りのことをするべきだと主張した。地域で戦没者の遺骨の捜索に携わる団体とロシア軍事史協会チェリャビンスク支部の代表を務めるパーヴェル・ストロモフは、彫刻設置に抗議してロシア軍事史協会を脱退した。彼は、マンネルヘイムはナチスに協力することで、それまでのロシアへの貢献をすべて消してしまったと主張している。また同市の退役軍人協会の代表ウラジーミル・グルーズデフは、彫刻の設置は退役軍人に対する侮辱だとして、独ソ戦を戦った父や戦死した父の仲間を思うと深い憤りを感じると述べた。チェリャビンスク州退役軍人協会の代表アナトーリー・スルコフも、私たちは道徳的な座標軸や人間的な価値体系を失ったとして、彫刻設置を批判した (ИА REGNUM, 2016q, r, Табаринцев-Романов, 2016)。

8月1日には左派の政治組織「もう1つのロシア」が、彫刻が設置された軍事工学技術大学の建物の前で抗議集会を開いた。参加者の1人は、この彫刻はナチスに協力した人物を称えるために設置されたとして、封鎖の生存者を不快にさせていると新聞社に語った。また「もう1つのロシア」サンクト・ペテルブルク支部代表のアンドレイ・ドミトリエフは、彫刻はレニングラード封鎖の生存者である自分の祖父母に対する侮辱だと主張した。さらに参加者の一部は「マンネルヘイムは終わった!」と書かれたポスターを掲げ、赤いペンキが入った缶を彫刻に投げつけた。警備員もこれを阻止せず、通報を受けて警察が到着した後も誰も拘束されなかったという。これについて意見を求められた郷土史家で市の地名学委員会に所属するアレクセイ・エロフェーエフは、破壊行為を肯定するつもりはないとしながらも、彫刻設置の発案者が人々を公然と挑発したことに問題があるとし、破壊行為が繰り返されることで、マンネルヘイムを好きではないフィンランド人にも不愉快な思いをさせているかもしれないとして、彫刻の設置が結果的にフィンランドとの良好な関係を傷つけるかもしれないという危惧を示した (ИА REGNUM, 2016e,i)。

市民の抗議と同時に、マスメディアや連邦と地域の議員も公的機関に調査を要求した。レグナム通信社は社長と編集長の連名で彫刻設置の合法性の確認を検事総長ユーリー・チャイカに要求した (ИА REGNUM, 2016j)。他方で、社会民主主義を目指す「公正ロシア」党に所属するサンクト・ペテルブルク市議会議員アレクセイ・コヴァリョーフは市長ボルターフチェンコに対して、彫刻は必要な手続きを経ずに設置されたと報告し、市の検察当局にも彫刻設置は違法だと訴えた。さらに防衛大臣ショイグーに対して、誰がこの彫刻を防衛省の建物に設置することを決

めたのか、防衛省は彫刻設置の合法性を確認したのかについて説明を求めた。ここで彼は、マンネルヘイムは内戦期に民族的理由によるロシア人の虐殺を組織し、独ソ戦ではレニングラード封鎖に加担しただけでなく、カレリアにはソ連の捕虜を収容する「死の収容所」が出現したとして、彼の名をこの街で記念することはすべてのロシア人の感情を侮辱し、戦死者の記憶に取り返しのつかない損害を与えると主張した (IA REGNUM, 2016b)。またロシア連邦共産党に所属する複数の下院議員は検事総長チャイカに対して、彫刻は刑法が禁じる「ナチズムの復権」<sup>5</sup>にあたるとして調査を要求した。また同党に所属する下院議員セルゲイ・オープンホフも、メディンスキー文化大臣とサンクト・ペテルブルク市長ポルターフチェンコに対して彫刻の撤去を訴えた (Мерзликин, 2016)。さらに市議会のロシア連邦共産党会派に所属するウラジーミル・ドミートリエフや政治団体「もう1つのロシア」は、彫刻が設置された中央区の行政府に彫刻の撤去を要求した。これを受けて中央区行政府は、調査のために福祉政策部門の代表者、文化局の専門家らから構成される委員会を発足させた。その後、委員会は、彫刻の設置に必要とされる書類が作成されていないことを明らかにし、この調査結果をもとに中央区行政府は8月8日に、彫刻の撤去を市議会の文化委員会に指示した (IA REGNUM, 2016c, f, g)。

#### IV. 抗議運動の拡大と博物館への移設

以上のようにマンネルヘイムの彫刻は様々な批判を集め、中央区行政府は8月8日に市議会の文化委員会に撤去を指示するに至った。市の法律によれば1か月以内に彫刻を撤去する必要がある、その期限となる9月8日はレニングラード封鎖の犠牲者の追悼記念日だった。9月1日に取材を受けた文化大臣メディンスキーは、撤去の指示については何も知らされていないと述べる一方で、マンネルヘイムの完全な情報を持たない人々のために長文の論稿を執筆しており、何らかの形で発表するつもりだと語った。(IA REGNUM, 2016c, 1)。他方で同日の『フォンタンカ』紙は、ある高官の情報として、この彫刻は連邦政府の外交政策の一環としてフィンランドとの協力の意思を示すために設置されたため、撤去が決定されるのは両国の関係に変化があった場合のみだと報道した。さらにその情報提供者は、市議会の文化委員会は期限を迎える9月8日までに法の抜け穴を探し、撤去が不可能となるような状況を作り出すだろうとも述べたという (Ключкова, Востроилова, 2016)。その後、文化委員会は撤去の指示について検討を続け、8月末にレグナム通信の問い合わせに対して同委員会が送付した回答は、マンネルヘイムの歴史的評価は行政当局の権限には含まれないとしたうえで、彫刻を設置したのはロシア軍事史協会であり、同委員会は彫刻設置の決定に関わっていないとし、さらに市の検事局が彫刻設置の合法性を調査中だと報告した (IA REGNUM, 2016d)。これに加えて、この彫刻は「記念碑」ではなく「浅浮彫」であり、浅浮彫の設置について定めた市の法律は存在しないと述べた。また彫刻が設置されたのは防衛省の建物であるため、市には彫刻を撤去する権限がないとも回答した。これに対してレグナム通信のモデアスト・コーレロフ編集長は、市当局は彫刻が持つ意味を評価することを拒否し、この彫刻を「浅浮彫」と呼ぶことで不作為を正当化する「恥知らずな嘘つき」だと述べて、もし今ヒトラーの「浅浮彫」が設置されたとしても、当局は簡単に受け入れるだろうと紙面

<sup>5</sup> 2014年の刑法改正によって、欧州枢軸国の主要戦争犯罪者の裁判と処罰のための国際軍事法廷の判決で立証された事実の否定、同判決で立証された犯罪の称賛、および第二次世界大戦中のソ連の活動について故意に虚偽の情報を流布する行為を公に行った場合、30万ルーブル以下の罰金などが科されることになった (立石 2020: 235)。

で非難した (ИА REGNUM, 2016o)。他方で、市議会議員コヴァリョーフらの訴えをもとに彫刻設置の合法性を調査していた市の検事局は9月初頭に調査結果を発表し、彫刻は防衛省の建物に設置されているために、市の検事局がこれに対応する法的な根拠が存在しないとして、コヴァリョーフらの訴えは西部軍管区の軍検察局に転送されたと報告した (ИА REGNUM, 2016k)。こうして9月初頭には市の文化委員と検事局がともに、彫刻設置の合法性を審査する権限や撤去の権限がないために対応できないという見解を示し、期限の9月8日を過ぎても彫刻が撤去されることはなかった。

クズネツォーフの訴訟の代理人を務める弁護士レメスロは同日に論考を発表し、マンネルヘイムの命令などの史料を紹介しながら、フィンランド内戦での白衛軍によるロシア人の虐殺やマンネルヘイムが独ソ戦開戦前にドイツ軍と交渉し、ソ連攻撃の準備を進めていたこと、東カレリアに設置された収容所での捕虜の虐待を強調し、フィンランドがドイツと同盟を結んだのは冬戦争で奪われた領土だけでなく、ソ連領の一部を占領するためだったと主張した。そのうえで、歴史上の人物は1つの時代だけを抜き出すことなく、総合的に評価されるべきだと述べて、この彫刻の設置は社会を統合するだろうか、あるいは怒りを生んで社会を分裂させるだろうかや疑問を呈した (Ремесло, 2016)。また同日には、サンクト・ペテルブルクのレーニン広場で「もう1つのロシア」などが抗議集会を開き、選挙運動をしないという条件のもとでさまざまな政治団体や政党の代表者、レニングラード封鎖を体験した住民ら数十人が参加した。出席者は彫刻の即時撤去とともに、文化大臣メディンスキーの辞任を要求した。「もう1つのロシア」のサンクト・ペテルブルク支部長アンドレイ・ドミートリエフはタス通信の記者に対して、彫刻の設置は「退役軍人やレニングラード市民の魂に唾を吐く行為であるだけでなく、反国家的行為」であり、「ナチズムの歴史の修正や復興は許されないという当局の声明にもかかわらず、私たちが結びつけるものを破壊している」と語った。参加者からは、「マンネルヘイムはレニングラードから出て行け」、「メディンスキーは政府から出て行け」といった叫び声が上がった。同日の夜には、「もう1つのロシア」の活動家アナトーリー・ティーシンが再び彫刻にペンキをかけ、器物損壊の容疑で警察に拘束された。ティーシンは警察官に対して、この恥ずべき行為に対する態度を表明したと発言したという (ТАСС, 2016c,e)。また9月10日には「時代の本質」が彫刻撤去を求めて、再び市内で会議を開催した。主催者は、当時市内で計画されていたロシア人の白衛軍指導者アレクサンドル・コルチャークの彫刻の設置や、ソ連時代の政治的抑圧の解明と記録に取り組む非政府組織「メモリアル」がスターリン体制の犠牲者の追悼のために各地で行う「最後の住所」活動<sup>6</sup>にも言及し、これらはすべて我々の街の歴史的記憶に対する戦争だと非難した (Суть времени, 2016)。これらの抗議活動について意見を求められた市議会議員レーズニクは、市民の声を無視したために対立が起こったのだと述べて、何度も攻撃を受けた彫刻の現状は、許容しがたい道徳的妥協の強要を断固として拒否するという社会の意志を示しているとともに、設置を主導した人々の月並みな近視眼を証明していると語った (РИА НОВОСТИ, 2016a)。

他方で9月27日には、クズネツォーフが市政府に対して起こした行政訴訟が棄却された。その理由は、彫刻の設置を市政府が決定したとは言えず、「政府が行っていない行為を違法とみなすことはできない」というものだった。さらに裁判所は、市議会の文化委員会を被告とすることも拒否した。また、除幕式に出席したゴヴォルノフ副市長とメディンスキー文化大臣の証人喚問

<sup>6</sup> スターリン体制の抑圧の犠牲者が最後に住んでいた建物に、その氏名や生没年などを記したプレートを取り付け、その情報を記録したデータベースを作成する活動。「時代の本質」はこの活動を、ロシア人による「自己ジェノサイド」がソ連時代に実行されたと主張していると非難している (立石, 2021: 77, Суть времени, 2016)。

を求めた原告側の要求も却下された (Васильев, 2016)。しかし、約10日後の10月6日には、彫刻の撤去を市議会の文化委員会に求める新たな訴訟が再び市内の裁判所に提起された。原告はレニングラード封鎖を経験し、現在はムルマンスクに住む76歳のフローラ・ゲラシチェンコであり、代理人はクズネツォーフの訴訟を担当した弁護士レメスロが務めた。彼女は彫刻設置の直後に息子が住むサント・ペテルブルクに向かい、彫刻を自分の目で見た後に、SNSを通じてレメスロを知ったという。これに加えて、ゲラシチェンコは市長ポルターフチェンコにも公開書簡を送り、レニングラードの住民とそれを防衛した人々に公式に謝罪し、彫刻設置の責任者を処罰することを要求した。彼女は『コメルサント』紙のインタビューで、独ソ戦が開戦した6月22日を直前に控えた6月16日に彫刻を除幕したのは卑劣な裏切りだとして、人々が歩く通りに彫刻を設置するべきではないし、もし設置するのであれば、「ヒトラーの同盟者であり、レニングラード封鎖を実行した」と彫刻の下に記すべきだと主張した。さらに、彫刻設置に抗議するために、9月18日の選挙で与党「統一ロシア」に投票するのをやめたとも述べた。彼女はサント・ペテルブルクに来てから、封鎖で命を奪われた親族の墓を訪れることができないうままだと語り、「彼らに対して恥ずかしいと感じます。母を救ってくれた少女たちに、何と云えばよいのでしょうか。私を救い、飢えで死んだ祖父に何と云えばよいのでしょうか。死んだ母には何と云えばよいのでしょうか」と述べた (Костюкевич, 2016a, ИА REGNUM, 2016n)。

彫刻に対する破壊活動も続き、10月3日には、彫刻に銃弾の痕跡のような穴が複数開いているのが発見され、10日には複数の若者が彫刻を斧で切り付けて傷を残した。こうしてさまざまな形の抗議が続くなかで、10月10日には『インテルファクス』紙が、市当局の関係者の情報として、近日中に彫刻が撤去されることが決まったと報道した。その情報提供者は、「彫刻は繰り返し襲撃されており、すでに体裁が悪くなっている」と述べたという。さらに、彫刻を設置した人々はすでに当初のような圧力を感じなくなっており、撤去が可能になったとも発言した (ТАСС, 2016b, Интерфакс, 2016, Мерзликин, 2016)。この報道はこれ以上の情報は伝えなかったが、報道から3日後の13日の夜、彫刻が突然撤去され、市内の「大戦中のロシア」博物館に移設されたことが明らかになった。館長のオーリガ・タラトウイノヴァはメディアに対して、ロシア軍事史協会事務局長のウラジスラフ・コーノフとともに1週間前に移設を決定したと回答し、この彫刻は「現代社会の状況」を証明していると語った (РИА НОВОСТИ, 2016b)<sup>7</sup>。さらに彫刻移設の翌日には、これまで発言を避けてきたロシア軍事史協会が彫刻の撤去を正式にウェブサイトで発表した。協会は、マンネルヘイムは内戦によってロシアを離れることを余儀なくされた数百万人の1人だとし、彼はその後も両国の良好な関係を維持しようとし、第二次世界大戦後にはフィンランド陸軍を統制できる人物としてモスクワに必要とされていたと述べた。そのうえでこの彫刻は過去との和解に向けた一歩であると主張し、彫刻は現代のロシア社会における歴史的論争の象徴として、修復されることなく博物館に保管されると説明した (Российское военно-историческое общество, 2016)。他方で協会の事務局長コーノフは『タス』紙のインタビューで、マンネルヘイムは何らかの法廷で罪を問われた犯罪者ではないと強調し、これは非常に不穏な兆候だとして、彫刻に穴を開けるような発想は正常ではないと批判した (ТАСС, 2016d)。

協会の理事会代表を務める元大統領府長官イヴァノフ<sup>8</sup>は、マンネルヘイムがソ連に多くの利益をもたらしたとは言わないが、ロシア帝国軍で多くの功績を残し、独ソ戦ではドイツの要求に反してレニングラードを攻撃せず、1944年には大統領としてソ連と休戦協定を結んだと強調

<sup>7</sup> 「大戦中のロシア」博物館は第一次世界大戦に特化した国内最大の博物館であり、1911年に建設が始まった軍事博物館をもとに、ロシア軍事史協会の発案で2014年8月に開設された。

<sup>8</sup> イヴァノフは2016年8月に、自然保護・エコロジー・交通問題担当の大統領特別代表に就任した。

した。さらに、彼はもちろん相反する側面を持つ人物だが、これは人々の生活が10月革命によって根本的な変化を被ったことを示す例だとして、残念ながら歴史を知らないか、あるいは個々の史実を知っていたとしてもそれを認めようとする人が多いと述べた (TACC, 2016a)。また協会代表の文化大臣メディンスキーは10月26日付の『ロシア新聞』に長文の論説を発表し、マンネルヘイムはニコライ2世を最後まで支持した数少ない優れた軍人の1人だったと主張した。論説によれば、内戦期には白衛軍だけでなく赤衛軍も残虐行為を行ったのであり、第二次世界大戦期にはマンネルヘイムはドイツと同盟を結びながらも可能な限り中立を保ち、レニングラード攻撃を拒否したのだった。また、冬戦争を始めたのは我々の側であり、フィンランドは独ソ戦で失った領土の回復を主張したことを忘れてはならないとし、ソ連との休戦後には、マンネルヘイムは反ソ連意識の強いフィンランド軍を統制できる人物としてソ連の指導者からも必要とされていたと主張した。さらに、独ソ戦を経験した人々の疑問は理解できると述べながらも、著名な作家グラニンが彫刻設置を支持したことと言及し、彫刻への破壊行為は社会主義政権期に建てられた記念碑が東欧で破壊される様子を思い出させるとして、彫刻を攻撃した人々は国民的合意に反してロシアを再び赤と白に、善と悪に分裂させたいのだろうか」と述べ、記念碑を破壊しようとした人々は戦争体験者ではないし、リベラルでも愛国主義者でもなく、愚か者だと非難した (Российская газета, 2016)。

市政府は彫刻の撤去についてコメントを発表せず、市政府の文化委員会代表スヘンコモ『コメルサント』紙の取材に応じなかったという。他方で市議会議員レーズニクは、市民も参加する公的な機関での議論を経て設置を決定するべきだったと述べて、メディンスキーの行動は不適切だったと批判した。また破壊行為を含む抗議活動を続けた「もう1つのロシア」のドミートリエフは、もし撤去を求める請願を書くといった普通の方法を取っていれば、おそらく当局は何の対応も取らなかっただろうと述べた (Коммерсантъ FM, 2016, Коммерсантъ, 2016)。エルミタージュ美術館のミハイール・ピオトローフスキー館長も同様に、誰も市民の声を聞こうとはしなかったと述べて、もし破壊行為がなければ彫刻はまだ元の場所にあり、レニングラード封鎖の犠牲者や生存者の記憶を冒瀆していただろうと語った (РИА НОВОСТИ, 2016b)。その後、12月13日には市議会の文化委員会に対するグラシチェンコの訴訟が、彫刻がすでに存在しないという理由で棄却された。しかし、彼女は12月21日に市当局から公式の書簡を受け取った。この書簡は、マンネルヘイムは国家にとって複雑な側面を持つ人物であり、レニングラード封鎖と数十万人の市民の犠牲の責任をナチ・ドイツの指導者と同様に負うべきであると述べて、彫刻に対する否定的な声の高まりは正当だと認めた。そのうえで、彫刻の設置を指示したのは市政府ではなく、連邦の組織の主導だったとも強調した (Костюкевич, 2016b)。

## V. おわりに

こうしてマンネルヘイムの彫刻をめぐる論争は、最終的にはロシア軍事史協会が彫刻を撤去し、大戦中のロシア博物館に移設したことで幕を閉じた<sup>9</sup>。政治学者ポフトは、この出来事は第二次世界大戦の歴史が、確立されたイデオロギーとプロパガンダの規範というひつぎに納めるのにいかに適していないかを明瞭に示した例だと指摘している (Бовт, 2016)。それと同時にこの出来事

<sup>9</sup> その後も両国の学術交流は続いており、ロシア革命とフィンランド独立100周年、マンネルヘイム生誕150周年を迎えた2017年には、両国の研究者が参加する学術会議などの催しがサンクト・ペテルブルクで開催された (Черняев, 2018:301)。

は、ロシアにおいて愛国主義と自国史像を一義的に結びつけることの難しさをあらためて示した事例でもあった。論争にはさまざまな政治的立場に立つ政治家や政治団体、市民、マスメディアが関わったが、政治的立場の違いや政権に対する支持の有無が彫刻設置への賛否を決めたわけではなかった。文化大臣メディンスキーは、彫刻を破壊しようとした人々を愛国主義者ではないと非難したが、論争に加わった人々に自分を愛国主義者だと思いかとたずねたとすれば、おそらくすべての人が自分は愛国主義者だと答えただろう。

彫刻設置を主導したロシア軍事史協会とメディンスキー文化大臣やイヴァノフ元大統領府長官は、革命前のロシアとソ連を区別せず、革命とその後の内戦でどちらの側に立ったかにかかわらず、あらゆる時代の指導的人物をすべて今のロシアに貢献した英雄とみなしており、こうした見解はチューロフら著名な政治家をはじめとして彫刻設置に賛成した多くの人に共有されていた。他方で歴史家アブラモフが、レニングラード封鎖やその犠牲者に対するマンネルヘイムの責任はスターリンに比べればはるかに小さいと述べたように、ソ連の指導者と比較すればマンネルヘイムは良い人物だったという観点から彫刻設置に賛成する意見もあった。歴史家ルリエーも彫刻撤去の翌年に新聞に発表した論説で、ソ連の指導者たちがマンネルヘイムよりも「不快で血に飢えた」人物だったのは確かだとして、彫刻を残してほしかったと述べている（Деловой Петербург, 2017）。他方で、前述のように政治学者ポフトは、マンネルヘイムもスターリンらソ連の指導者も同じように大きな犠牲を生んだとしたうえで、ソ連の指導者の名前は今も各地の地名に残されているのだから、マンネルヘイムの記念彫刻の設置に反対するのは偽善的だと主張した。

これに対して彫刻設置に反対した人々の意見には、ヒトラーやスターリンの正当化が許されないと同様に、マンネルヘイムの正当化も許してはならないと主張するカレリア地峡軍事博物館館長イリンチェーフの見解のほかに、ロシア連邦共産党の議員や「時代の本質」のように、スターリン期を含めてソ連時代を肯定的に評価しようとする立場からマンネルヘイムとヒトラーの協力を重視し、設置に反対する意見もあった。また、国家の歴史の評価とは別に、第二次世界大戦期の自分や家族の体験から彫刻の設置に抗議するという声も多かった。つまり、マンネルヘイムの評価だけでなく、レーニンやスターリンをはじめとするソ連時代の指導者、ソ連という国家の評価についても、彼らの間に一致した理解は存在しなかった。これに加えてこの論争は、連邦内のそれぞれの地域に固有の歴史があり、地域住民の議論なしに特定の歴史観を強制することはできないことも明らかにした。以上のように、マンネルヘイムの記念彫刻をめぐる2016年の論争は、現在のロシアの歴史認識が、連邦当局が愛国主義的だと判断した自国史像を社会に広め、利用しているという観点のみでは理解できないことを示したといえることができる。したがって、ロシアの歴史認識と政治、愛国主義の関係をめぐる議論や政府の政策を分析するには、それぞれの論者が念頭に置く愛国主義の理解の違いを明らかにするとともに、それぞれの地域の歴史と私的な体験や家族の記憶が国家の歴史の認識とどのように結びついているのかをより詳細に検討することが必要とされるだろう。

## 参考文献

- Абрамов, В. К. 2016. "Российский генерал и маршал Финляндии", Финно-угорский мир. № 4:57-68.
- Аптекарь, Павел. 2016. "Карлу Густаву Маннергейму не повезло с Сергеем Ивановым",

- Ведомости. 2 сентября [https://www.vedomosti.ru/opinion/articles/2016/09/02/655415-mannergeimu-ivanovim] (URLはすべて2021年9月17日に確認).
- Асанова, Антонина. 2015. "Мединский приедет в Петербург с Маннергеймом", Фонтанка. Ру. 9 июня[https://www.fontanka.ru/2015/06/08/144/].
- Ахонен, Аннели. 2016. "Маннергейм — герой или фашист?", Иносми. Ру. 20 Сентября [https://inosmi.ru/social/20160920/237890946.html].
- Бекман, Йохан. 2016. "Для Маннергейма существовала только одна Россия –Российская Империя", Русская народная линия. 20 июня[https://ruskline.ru/news\_rl/2016/06/20/dlya\_mannergejma\_suwestvovala\_tolko\_odna\_rossiya\_rossijskaya\_imperiya].
- Бовт, Георгий. 2016. "Казус Маннергейма", Газета. ru. 20 июня [https://www.gazeta.ru/comments/column/bovt/8317061.shtml].
- Васильев, Алексей. 2016. "Петербургский суд отказал в иске о демонтаже доски Маннергейму", Российская Газета. 27 сентября.
- Вирмавирта, Я. 1994. "Исторические портреты", Вопросы истории. №1:56-74.
- Вольтская, Татьяна, Баратов, Петр. 2016. "В Петербурге открыли памятную доску Карлу Маннергейму", Радио Свобода. 16 июня[https://www.svoboda.org/a/27802583.html].
- Володченко, Валерий. 2001a "Репортер. Всадник раздора", Российская Газета. 2 августа. \_\_\_\_\_ . 2001b "Кто Вы, маршал Маннергейм?", Российская Газета. 4 сентября.
- Георгиев, Ф. 2001. "Путинская линия Маннергейма", Советская Россия. 8 сентября.
- Деловой Петербург. 2017. "Местночтимый барон. Историк Лев Лурье о Карле Маннергейме", №96. 9 Июня.
- Демурин, Михаил. 2016. "Почести Маннергейму и примирение с прошлым", РИА НОВОСТИ. 17 октября [https://ria.ru/20161017/1479381963.html].
- Дубшан, Федор. 2017. "Линии Маннергейма", Вечерний Санкт-Петербург. №50. 23 июня.
- Ерофеев, Алексей. 2005. "История в лицах. Маннергейм был великий человек, но...", Парламентская Газета. 29 января.
- ЗАКС.РУ. 2016. "Максим Резник высказался о памятной доске Маннергейму", 16 июня [https://www.zaks.ru/new/archive/view/154886].
- Зубов, Игорь. 2015. "В Петербурге хотели увековечить память гитлеровского «брата по оружию»", Общественный контроль. 23 июня [https://ok-inform.ru/obshchestvo/38974-v-peterburge-khoteli-uvekovechit-pamyat-gitlerovskogo-brata-po-oruzhiyu.html].
- ИА REGNUM. 2016a. "Автор иска к Смольному напомнил суду о преступлениях Маннергейма", 1 сентября [https://regnum.ru/news/society/2174249.html]. \_\_\_\_\_ . 2016b. "Депутат просит Шойгу наказать повесивших доску Маннергейму в Петербурге", 4 августа [https://regnum.ru/news/polit/2163397.html]. \_\_\_\_\_ . 2016c. "Документы о демонтаже доски Маннергейму пришли в Музей городской скульптуры", 1 сентября [https://regnum.ru/news/society/2174101.html]. \_\_\_\_\_ . 2016d. "Доска Маннергейму: власти Петербурга указали на Мединского", 29 августа [https://regnum.ru/news/society/2172599.html]. \_\_\_\_\_ . 2016e. "Доска Маннергейму может испортить отношения России с Финляндией", 1 августа [https://regnum.ru/news/polit/2162014.html]. \_\_\_\_\_ . 2016f. "Доска Маннергейму появилась незаконно, подтвердили власти Петербурга",

- 17 августа [<https://regnum.ru/news/society/2167904.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016g. "Доску Маннергейму в Петербурге вновь залили краской, полиция не мешала", [<https://regnum.ru/news/society/2161995.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016h. "Кремль предал блокадников и защитников Ленинграда ради союзника Гитлера", 16 июня [<https://regnum.ru/news/society/2145659.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016i. "Люди не успокоятся, пока доска Маннергейму висит в Петербурге", 1 августа [<https://regnum.ru/news/polit/2162014.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016j. "Обращение ИА REGNUM против доски Маннергейму направлено военному прокурору" 1 августа [<https://regnum.ru/news/polit/2161841.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016k. "Прокуратура Петербурга: доска Маннергейму — вне закона", 2 сентября [<https://regnum.ru/news/society/2174671.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016l. "РВИО не хочет вместе с Мединским отвечать за доску Маннергейму", 3 сентября [<https://regnum.ru/news/society/2174823.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016m. Суд против доски Маннергейму продолжится, даже если власти ее снимут // 31 августа [<https://regnum.ru/news/2173765.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016n. "Те, кто установил доску Маннергейму, должны принести публичные извинения", 17 октября [<https://regnum.ru/news/society/2193298.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016o. "Теперь власти Петербурга легко согласятся с открытием «барельефа» Гитлеру", 18 августа [<https://regnum.ru/news/polit/2168535.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016p. "Финские снаряды не падали на Ленинград не из-за «доброй воли» Маннергейма", 26 октября [<https://regnum.ru/news/society/2197509.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016q. "Челябинские блокадники против памятной доски Маннергейму" 1 июля [<https://regnum.ru/news/society/2152212.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016r. "Челябинские ветераны уверены: Маннергейм и город на Неве несовместимы", 16 июня [<https://regnum.ru/news/polit/2145621.html>].
- Интерфакс. 2016. "Доску Маннергейму в Петербурге демонтируют до конца", 10 октября [<https://www.interfax.ru/russia/531811>].
- Клочкова, Ксения, Востроилова, Татьяна. 2016. "Можно ли снять Маннергейма", Фонтанка. Ру. 1 сентября [<https://www.fontanka.ru/2016/09/01/003/>].
- Коммерсантъ. 2016. "В Санкт-Петербурге демонтировали мемориальную доску Карлу Маннергейму", 14 октября.
- Коммерсантъ FM. 2016. "Власти были вынуждены снять мемориал", 14 октября. [<https://www.kommersant.ru/doc/3117555>].
- Костюкевич, Марина. 2016a. "Блокадница Ленинграда выступила против финского маршала", Коммерсантъ. 7 октября.
- \_\_\_\_\_. 2016b. "Признание после снятия", Коммерсантъ. 23 декабря.
- Курьер Карелии. 2007. "Маннергейму здесь не место?", 29 мая.
- Лумме, Ханна. 2016. "Крупнейшее в истории Финляндии массовое убийство женщин", ИНОСМИ.РУ. 3 апреля [<https://inosmi.ru/history/20160403/235967862.html>].
- Майорова, Юлия. 2016. Карл Маннергейм — нацист или русский герой? // LIFE. 3 сентября [<https://life.ru/p/898306>].
- Медведева, Александра. 2009. "Мемориальная доска Маннергейму на линии общественного

- мнения", Фонтанка.Ру. 25 мая [<https://www.fontanka.ru/2009/05/25/146/>].
- Мерзликин, Павел. 2016. Доска Маннергейму в Петербурге: зачем открыли, кто поддержал и почему ее не хотели снимать // Бумага. 14 октября [<https://paperpaper.ru/doska/>].
- Миронова, Лидия. 2007. "Русский биограф Маннергейма", Выборгские ведомости. 4 августа [<http://vyborg-press.ru/articles/1217/>].
- Набойщиков, Григорий. 2005. "Еще раз о маршале Маннергейме", Невское время. 15 февраля [[https://nvspb.ru/2005/02/15/eshe\\_raz\\_o\\_marshale\\_mannergejm-22382](https://nvspb.ru/2005/02/15/eshe_raz_o_marshale_mannergejm-22382)].
- Назаров, Олег. 2016. "Блокада Ленинграда, Маннергейм и забывчивые потомки", РИА НОВОСТИ. 9 августа [<https://ria.ru/20160809/1473920689.html?in=t>].
- Николаева, Людмила. 2016. "Сначала сняли Иванова, теперь Маннергейма", Свободная пресса. 1 сентября 2016 [<https://svpressa.ru/society/article/155655/>].
- Овсянов, Авенир. 2003. Маршал Маннергейм без "линии любви" // Калининградская Правда. №161.
- Петров, Виталий. 2016. "У каждого была своя правда: Сергей Иванов открыл мемориальную доску в честь Карла Маннергейма", Российская газета. 16 июня.
- Пырх, Виталий. 2001. "Цветы Маннергейму", Красноярский рабочий. 12 сентября.
- Ремесло, Илья. 2016. "Блокада Ленинграда, доска Маннергейма" и забытые уроки истории", РИА НОВОСТИ. 8 сентября [<https://ria.ru/20160908/1476401912.html>].
- РИА НОВОСТИ. 2007. "В Карелии протестуют против установки памятника Маннергейму", 14 мая [<https://ria.ru/20070514/65456509.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016a. "Глава Эрмитажа одобрил перенос доски Маннергейму в Царское село", 14 октября [<https://ria.ru/20161014/1479228192.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016b. "Доску Маннергейму в Царском селе не будут дополнительно охранять", 14 октября [<https://ria.ru/20161014/1479228505.html?in=t>].
- \_\_\_\_\_. 2016c. "Опубликован иск к властям Петербурга по демонтажу доски Маннергейму", 1 сентября [<https://ria.ru/20160901/1475865231.html?in=t>].
- \_\_\_\_\_. 2016d. Песков о памятной доске Маннергейму: он незаурядный человек. 16 июня [<https://ria.ru/20160616/1448728673.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016e. "Противоречивая история: почему памятники так будоражат общество", 15 октября [<https://ria.ru/20161015/1479258581.html>].
- Рогозина, Ольга. 2014. "Теему Кескисарья: В генах финов нет этнической ненависти", Вечерний Петербург. 27 марта.
- Российская газета. 2016. "Мединский: В нашей истории нет лишних фигур и потерянных звеньев", 26 октября.
- Российское военно-историческое общество [<https://rvio.histrf.ru/>].
- \_\_\_\_\_, 2016. "О Памятном знаке Маннергейму", 14 октября [<https://rvio.histrf.ru/activities/news/o-pamyatnom-znake-mannergeimu>].
- Санкт-Петербургские Ведомости. 2007. "Маннергейм. Забытое прошлое", 23 мая.
- Скворцова, Е. 2016. "Мост Кадырова и доска Маннергейму", Собеседник. №23. 22 июня.
- Суть времени. 2016. "Конференция «Город на Неве против героизации союзников Гитлера и военных преступников»", 9 сентября [<https://eot.su/node/21997>].
- Табаринцев-Романов, Сергей. 2016. Ветераны против "доски Маннергейма" // Слово.

№13. 1 июля.

- ТАСС. 2016а. "Иванов: установка памятной доски Маннергейму не была ошибкой", 18 октября [<https://tass.ru/obschestvo/3712050>].
- \_\_\_\_\_. 2016b. "Мемориальную доску Маннергейму в Петербурге могли обстрелять", 3 октября [<https://tass.ru/proisshestiya/3673192>].
- \_\_\_\_\_. 2016с. "Полиция задержала активиста "Другой России" за акцию против доски Маннергейму", 9 сентября [<https://tass.ru/proisshestiya/3606779>].
- \_\_\_\_\_. 2016d. "РВИО: ситуация с демонтажом доски Маннергейму - тревожный общественный симптом", 27 октября [<https://tass.ru/obschestvo/3739059>].
- \_\_\_\_\_. 2016е. "Участники митинга против доски Маннергейму в Петербурге потребовали отставки Мединского", 9 сентября [<https://tass.ru/kultura/3606391>].
- Тизонова, Елена. 2006. "За линией Маннергейма", Тихоокеанская Звезда. 11 апреля.
- Фонтанка. Ру. 2016а. "Даниил Гранин: Петербург обязан Маннергейму", 17 июня [<https://www.fontanka.ru/2016/06/17/130/print.html>].
- \_\_\_\_\_. 2016b. "Зря забыли, как Маннергейм отворачивался, когда расстреливали русских офицеров", 17 июня [<https://www.fontanka.ru/2016/06/17/197/>].
- Хакназаров, Евгений. 2016. "Карл Маннергейм подошел к Петербургу со стороны Москвы", Фонтанка.Ру. 2 июня [<https://www.fontanka.ru/2016/06/02/168/>].
- Ханбабян, Армен. 2001. "Зачем Путин перешел линию Маннергейма", Независимая газета. 4 сентября [[https://www.ng.ru/politics/2001-09-04/1\\_putin.html](https://www.ng.ru/politics/2001-09-04/1_putin.html)].
- Черняев, В.Ю. 2018. "150 лет Маннергейму", Петербургский исторический журнал. № 1: 298-310.
- Чуров, Владимир. 2005. Тайна четырех генералов. Москва: Кучково поле.
- ВВС. Русская служба. 2001. "Путин на линии Маннергейма", 4 сентября [[http://news.bbc.co.uk/hi/russian/press/newsid\\_1524000/1524103.stm](http://news.bbc.co.uk/hi/russian/press/newsid_1524000/1524103.stm)].
- Livejournal. 2016. "Тезисы с конференции против доски Маннергейму, резолюция", 3 июня [<https://tingud.livejournal.com/413912.html>].
- Meinander, Henrik. 2011. "A separate story? Interpretations of Finland in the Second World War," Henrik Stenius, Mirja Österberg and Johan Östling (eds.), *Nordic Narratives of the Second World War: National Historiographies Revisited*, Lund: Nordic Academic Press.
- Pearce, James C. 2021. *The Use of History in Putin's Russia*, Milton Keynes: Vernon Press.
- Screen, J.E.O. 2000. *Mannerheim: The Finnish years*, London: C. Hurst.
- 立石洋子 2019年「ロシアと第二次世界大戦の記憶」成蹊大学法学部編『教養としての政治学入門』東京:筑摩書房.
- \_\_\_\_\_. 2020年『スターリン時代の記憶:ソ連解体後ロシアの歴史認識論争』東京:慶應義塾大学出版会.
- \_\_\_\_\_. 2021年「抑圧の歴史といかに向き合うのか——「メモリアル」の活動」『ワセダアジアレビュー』No.23:73-78.